

## 漱石論コメント、いろいろ集

漱石没 100 年、生誕 150 年を期し、様々な読書イベントが陸続、読書論、漱石論へ、さらに why に応える文学論、how に応える漱石論、エンタテイメント性の作品論など

そして、作品の評価は、

A ストリーのみよしあし

B 含まれている思想の深さ

C 含まれている知識の豊かさ

D 文章のよし悪し

E 現実性の有無。絵空事でも小説としての現実性は大切だ。

F 読む人の好み。作者への敬愛、えこひいきなど

評価論としての「漱石を知っていますか」阿刀田 高

作品の全貌を俯瞰、わかりやすく解説する手引書、カタログとしての「知っているようで知らない夏目漱石」作品の面白さ、漱石の謎を発見、解明。読み方のこつなど。出口 汪(ひろし)

水川隆夫「明治時代と漱石」は、時代背景と漱石の作品描写の作法を通して、漱石・作品の解説をしている。 2018/1/28(日) 午後 10:50

漱石と日本の近代 上 石原千秋「自意識は強いのに他者との関係に自信が持てない」――漱石文学の主人公たちは皆、早く生まれすぎた“現代人”だったのかもしれない。『それから』まで主要な前期六作品を取り上げ、「漱石的主人公の誕生」という新たな解釈をもとに物語の奥に込められたテーマを浮き彫りにしていく。時代を超えて通じる閉塞感と可能性を読む。 <https://blogs.yahoo.co.jp/yhjp711/57734009.html>

漱石と日本の近代 下 石原千秋都市空間に住む家族の物語を描き続けた漱石。明治民法によって家の中にも権利の意識が持ち込まれ、近代的「個」の自覚、生活に浸透する資本主義、家族を離れた愛など、新たなテーマが見出されていった。中でも漱石にとって最も謎に満ち、惹かれた対象は「女の心」だった……。後期六作品を中心に時代と格闘した文豪像を発見する試み。 <https://blogs.yahoo.co.jp/yhjp711/57734011.html>

2018/2/2(金) 午前 10:51

漱石研究<sup>[1]</sup> 漱石研究はかつての作品論中心のものから現在では歴史、思想、比較文学などの各方面から極めて多角的な探求がなされている。それらに適宜明配りながら、全体としては一般読者にとって漱石の世界への導きとなることを目指したもの。

漱石に関する研究、評論は言うまでもなく汗牛充棟だが、その世界の広大さゆえに、生涯と思想と作品を相対的にとらえる試みが意外に多くなされていない。

小宮豊隆の「夏目漱石」と江藤淳の「漱石とその時代」は貴重な先例（せんしょう）と

して参考になる。

カワセミ ] 2018/2/8(木) 午後 9:40

同時代の読者が、どのように漱石の小説の言葉一つひとつを読み解くことが出来たかに軸足を置き、そこに、小説内部の設定と、一つひとつの固有名の世界史的なつながりを見出し、漱石の時代と状況へのかかわり方について語り、実際の対話における言葉と言葉の間で、それぞれどのようなはじけ方を、読者は読み取って、その言葉のやり取りに参入することを願いたい。生誕百五十年において、漱石夏目金之助の文学は、いま生きている私たちの現在を照らし出す言葉を、読者にはしっかりと送り届けていることが確認されよう。

2018/2/10(土) 午前 8:21

「文学論」から見渡す漱石文学では、「文学論」における「F + f」の公式が、初期小説の中で、実践的な執筆過程において方法として自覚されていった。「文学論」の理論と実作との関係は、議論を貫く一つの道筋となる。

2018/2/10(土) 午前 8:22

小説家としてデビューする以前の若き漱石が、英国留学からの帰国後、東京帝国大学で行なった講義をもとにした未完の大著『文学論』を、あらためて読み解き、そこに込められたさまざまな可能性を徹底的に引き出そうとする、野心的な長編論考である。著者の山本貴光は、その博覧強記を駆使して、漱石が『文学論』で、いったい何を探り当てようとしたのかを鮮やかに炙（あぶ）り出し、現在「文学」を書いたり読んだりしようとしている者たちに使用/応用可能にしようと試みる。『文学論』の出版は一九〇七年、そう、これは実に百十年も昔の「文学論」の再生プロジェクトなのである。

2018/2/10(土) 午前 8:49

漱石が考えたその先を探索する文学とはなにか、という問いはひどくむずかしい。読めばわかるという立場もあるが、皆の意見が一致するはずもない。あらゆる文字の並びは文学的なものであるという考え方があり、どんな文字の並びも文学的なものではありえないという考え方がありうる。そんな広大な領域を相手にするのは困難だ。文学なるものをひとりで日本に持ち帰ろうと決意した夏目漱石は、文学的な文章とは、読者の心を変化させるものだと考えた。認識があつて心の動きがある。そういう仕組みの連なりとして文学なるものを考えようとし、「文学論」の名前でまとめた。評価は大きく分かれており、科学の真似事（まねごと）、当たり前のことを難しく書いている、何を書いているのかわからない等々言われる。3部よりなる本書の第1部はその「文学論」の肝の部分を取りだして、現代語訳して解説する。これで少なくとも漱石がどんなことを言おうとしていたのかはわかるようになっている。第2部は、第1部の立場から、古今東西の小説のうちいくつかを読み直してみる試みである。

2018/2/10(土) 午前 9:03

第3部では、未完に終わった「文学論」の続き、そうして発展の方向が探られていく。漱石の視点は、人間の認識とは、文学というものを可能としているこの世界とはという地

点にまで及ぶ。当時先端の知見をもとに人の認識や文学の変化を考えようとした。漱石が小説を書いた期間はおよそ10年にすぎない。その間に小説史を駆け抜けるように、どれが代表作なのかもわからぬほどに多様な作品を残した。これは「文学論」的な大きな視座の実効性を示すものと考えてよいのではないかと思う。漱石の「文学論」が未完に終わったのは文学の変化には終わりが無いからなのかもしれない、こうして「文学論」自体がつぎたされながら成長していくものだからなのかもしれない

2018/2/10(土) 午前 9:04

自我と超自我の苦闘の歴史<sup>[1]</sup>漱石は日本が日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦と言う3つの戦争を経験した時代の作家ゆえに、漱石文学は、日本の西洋列強に追いつき、追い越せと戦争に前のめりになっていた時代に、「インテリたちはどのように知性を働かせたのか」と言うことの1つのモデルとなっている。つまり、漱石の作品には、「知識人は国家の危機の時代にどのような態度を取るべきか」、あるいは、「国家が危機を迎えた時、知識人はどのような挫折を体験することになるか」といった「自我の体系」が刻み込まれている。<sup>[2]</sup>自我の体系→基本的な自己認識個々の人間が持つ精神的な背景のこと自我は、「超自我」と表裏一体<sup>[3]</sup>「超自我」は、自我に対して道徳的な監視や命令などを行う<sup>[4]</sup>超自我は、「良心」、道徳的規範を命令する「良心」の役割り→「罪悪感」「神」「呪縛」に置き換わる。また、「制度や法」、国家など個人を外側から守ったり、あるいは縛ったりする超越的な存在。

2018/2/12(月) 午後 0:27

どのような人間にも心のうちで「超自我」となんらかの関係を強いられる。したがって、人は、超自我と折り合い、妥協することもあれば、ときには、戦いや挫折を強いられることもある。この「自我と超自我の苦闘」という構造は、近代文学に限ったことではなく、文学全体の一つの基本構造である。自我を語る作家は、超自我に対して常に敗北する運命にある。そして、その敗北は必ず一つの屈折となって、作品世界に織り込まれていく。つまり、近代文学とは、「インテリ作家たちの自我が、黒船来航以降の維新、戦争、敗戦、占領などの激動期に超自我と対峙した時の苦闘の記録」と言える。その苦闘の記録をなぞり、追体験することが、近代文学を読むという営み。日本の近代文学を解読することは、すなわち、日本人の精神分析をすることに直結する。<sup>[5]</sup>現代を生きる我々にとっては、近代知識人の苦闘のプロセスを、読書を通じて辿り直すことによって、超自我に対峙しうる強固な自己を獲得できるのである。

2018/2/12(月) 午後 0:28

丸谷才一 闊歩する漱石 <https://blogs.yahoo.co.jp/yhjp711/57996870.html>

2018/2/13(火) 午後 9:06

柄谷行人 漱石の多様性 <https://blogs.yahoo.co.jp/yhjp711/57998780.html>

2018/2/16(金) 午後 6:55

漱石文学について漱石は留学中に「文学」に対する理論として(F+f)の考えを確立しています。いろいろ解釈がありますが、フォーカス、ファクトの F+小文字の f、フィーリング、情緒です。このように表現された文学は、これを読む読者との関係を通じて成立させると。書き手と読み手の間には創造的なコミュニケーションが生まれ、発起、展回します。「文学的」センスは、事象の分析から写生、物語化、まとめて発信する手法、技術ですね。読み手の方もそれなりに読みの深化が問われます。文学というものは、ドキュメントでもフィクションでも可で書き手と読み手相互において成立させるものですね。それぞれ的人格形成や、事象の分析、総合化、そして表現を通しての創造化、読者も全く同様な意識、思考作用を要求されます。ね最近、ようやくと漱石読書のシルエットが見えてきた感じですよ。こういうセンスは、普段の暮らしにおいても、自らに思考センス、生き方、人間関係の創造においても十分に役に立ち、世界の広がりをもたらすものと、思われます

#### ■カジュアル読書

夏目漱石をめぐる対談本が相次いで出ている。語り合えば、新たな気づきがある。

いとうせいこう×奥泉光『漱石漫談』（河出書房新社・1728円）は漫談スタイルで漱石を語る。2人はトークライブ「文芸漫談」で、古今東西の名作を語ってきた。漱石は『吾輩は猫である』『草枕』『三四郎』など8作。それらを採録した本書を漫談するイベントが都内であった。

漱石を読むと自分の小説を書きたくなくなって思わずパソコンを起動してしまう、と奥泉さん。「全然違うものを違う文体で書いているのに、漱石がすごく良くて、この質感は自分の小説で実現できているのかと思ひ、ぱたんと本を落としてしまう」。漱石は作家の言葉にも刺激を与える。「今まで使ったことのない言葉に注目しちゃう」と奥泉さん。「嫂（あによめ）とかね」といとうさんが言えば、奥泉さんが「石畳ではなく石磴（いしだたみ）」と続ける。

『吾輩は猫である』をいとうさんは「猫鍋」と表現する。「『猫』を書きながらほかの小説がぐつぐつ煮えてできあがってくる」。奥泉さんも「5章ぐらいで小説家としての漱石がむくむくと立ち上がってくる。以前は気づかなかった。漫談での発見でした」。

年を重ねて楽しめるようになったという『門』。「生き生きとした失敗」と言い切る『ころろ』。「残りの作品も全部やらないと」と、いとうさん。最後は。「あれを理解して小説を書こうとした作家はいないでしょう」と奥泉さん。『文学論』が待っている。

いとう×奥泉が10年以上しゃべり続けてきたのに対して、この2人は10年以上、言葉を交わさなかった。石原千秋×小森陽一『漱石激読（げきどく）』（同・1944円）は漱石を専門とする研究者の対談本だ。

ふたりは『文学論』から始める。冒頭の難解な「文学的内容の形式は(F+f)なることを要す」を読み解いてゆく。

小森さんは「文学について考えるために心理学と社会学を使うというのがまず異様な決意」と話し始める。「今でもすごく新しいと思う」。これに石原さんは、読者の心理分析のために漱石は心理学を必要とした、と受ける。当時の新聞に書かれた事件や風俗を、漱石は新聞小説に取り入れ、読者はそれを新聞で読んでいた。「読者を大前提としなければ文学は成立しないということにすでに気がついていた」と石原さん。対談がたどり着いた先はその斬新さ。「漱石はすごい、すごい」なのだ。

僕は漱石を読む 斎藤 孝 著 KK ロングセラーズ

本の内容

悩みは深い浅い、重い軽いでは測れません。おおもとにある、心の苦しみが問題なのです。漱石の小説は、夫婦関係や親子関係、進学や職場の問題、恋愛・友情、癒しと、現代の私たちに通ずる悩みや問題が描かれていて、それらを今の状況にあてはめて考えることで、ヒントや解決策を探るものになっています。

目次

- 第1章 坊っちゃん-「善人」と「悪人」を決めることが「正義」なのか？
- 第2章 三四郎-大人になったらできない失敗は青春期に終えておく
- 第3章 門-社会的に弱者同士にとって結婚は「避難所」となる
- 第4章 道草-とことん言い合う夫婦は案外長持ちする
- 第5章 こころ-白黒ははっきりさせて生きるには世間は曖昧なことが多すぎる
- 第6章 草枕-煩わしい人間関係から逃れるためには居場所を変える

諸処コメント

小説という形で、他人の人生を自分にあてはめながら眺めてみる。流れの速い時代だからこそ、流れにまかれるように流されていくのではなく、ほとりに座ってじっと眺めてみる。そんな時間が必要ではないでしょうか。

2011/9/14(水) 午前 9:31

漱石小説の人物たちは、確固たるよりどころが持てずに心の揺れに翻弄されてしまう人たちであり、それはそのまま私たちの姿なのかもしれない。

2011/9/14(水) 午後 8:50

自分は正しいんだと言いながら、自らその場を立ち去る「坊っちゃん」好きになった女性の真意が分からず、ただ右往左往しているだけで終わった「三四郎」過去を割り切って今を生きることができない「門」の宗助頭はいいのに人の心が読めずに優柔不断な「道草」の健三どこまでも罪の意識をひきずって生き死を選ぶ「こころ」の先生住みにくい人の世に疲れてしまった「草枕」の画家

2011/9/14(水) 午後 8:57

悩みつつ生きる彼等の姿を見て、「夫婦ってこういうものなんだよな」、「仕事ってこういうことあるよ」、「青春ってこんな感じだよ」と受け入れられると、少なくとも心が静まっていくということがある。

2011/9/14(水) 午後 9:01

小説の世界も現代の世界も共通していることは、どんどん心が肥大化していくということ。たいしたことではなくとも、何か大層なことのようにとらえ悩んでしまったり、思い悩むあまりに不安が増殖してしまったりということ。少し体を動かすだけでも解消できることもあるのに、それをせず心の中にため込んでいってしまう。

2011/9/14(水) 午後 9:08

人間の心は、いつも何か食うものを探している。ほっておけばいくらでも膨れ上がるのが心。いつもいつも探している。それが見つかり、パクッと食べて膨らんで、それを繰り返していたら悩みや苦しきは肥大化して心がいっぱいいっぱいになっていくことは当然である。解決しがたい悩みや苦しみもある。

2011/9/14(水) 午後 9:16

でも、何かしらの方法はあるはず。少しずつ「散らす」ことだってできる。悩みに沈んで陰鬱な人生を生きるか、どこか割り切って幸せな人生を生きるか、選ぶのは自分自身。

2011/9/14(水) 午後 9:20

心が肥満気味と思う人がいたら、ちょっと現実を離れて小説を読むことで、楽になったりすっきりしたり、何か変えられる事が見つかるかもしれない。

百年後に漱石を読む 宮崎かすみ 著

読み方というよりか解釈ですかね。途中で挫折しそう。 2013/1/3(木) 午後 4:48

漱石は、同時代の無理解を託しつつも、「百年計画」を立て、百年かけて勝負するつもりで書いた。ロラン・バルトはかつて作者の死を宣告したが、私はむしろ、百年後に漱石を新たによみがえらせたという思いで本書を書いた（あとがき）より

『知っているようで知らない夏目漱石（講談社+α新書）』

そんな問題を考えるにあたって、奥深い視点を与えてくれたのが『知っているようで知らない夏目漱石（講談社+α新書）』（出口 汪/講談社）。

本書は漱石作品の解説書だが、漱石は不倫が姦通罪という犯罪だった時代に、男女の三角関係を多く描いてきた作家でもある。本書ではそんな漱石の作品も丁寧に解説しており、特に興味深かったのが『行人』の読み解きだ。

行人』の主人公・一郎は、妻である直の自分への愛情は本当のものなのか…と確信できずに苦しんでいる。そして弟の二郎に「直は御前に惚れてるんじゃないか」と言い、妻の貞操を確かめてほしいと頼む。

結局、直の貞操は分からずじまいだったが、二郎と話し合う過程で一郎は激怒。夫の弟と慕い合った結果、夫に殺されることになった「パオロとフランチェスカ」の逸話（ダンテの『神曲』に登場）を引き合いに出し、「二郎、なぜ肝心な夫の名を世間が忘れてパオロとフランチェスカだけ覚えているのか。その訳を知ってるか」と弟を問い詰める。続く一郎の言葉は以下の様なものだ。

おれはこう解釈する。人間の作った夫婦という関係よりも、自然が醸した恋愛の方が、実際神聖だから、それで時を経るに従って、狭い社会の作った窮屈な道徳を脱ぎ棄てて、大きな自然の法則を嘆美する声だけが、我々の耳を刺戟するように残るのではなかろうか。もっともその当時はみんな道徳に加勢する。二人のような関係を不義だと云って咎める。しかしそれはその事情の起った瞬間を治めるための道義に駆られた云わば通り雨のようなもので、あとへ残るのはどうしても青天と白日、すなわちパオロとフランチェスカさ。どうだそうは思わんかね（『行人』より）

フェリス・ブックス (14)『主人公はいない—文学って何だろう』佐藤裕子 著

出版社：フェリス女学院大学 発行：2009年3月31日

この本は、主に大学1年次の基礎ゼミで必ず話すことを中心として、「文学って役に立つの?」という学生からの問いと、「文学って何だろう」という問いに答えたものです。「文学とは何か」という問いは、夏目漱石が著書『文学論』で取り上げたテーマでもあります。大学で学ぶ「文学」は、社会に出て自分を高め、役立てることのできる、最も基本的な「実学」です。様々な文学作品と、それにまつわる社会的・歴史的現象を素材として、社会に出て自分を高め、役立てることのできる実践的能力を養いましょう!

世界を魅了した夏目漱石

夏目漱石の研究者である日本語日本文学科佐藤裕子教授が、日本のみならず世界をも魅了した漱石文学について解説します。

その1 夏目漱石国際シンポジウムの概要

その2 漱石のロンドン体験

その3 『文学論』の成立

その4 『文学論』序の意義

その5 (F + f) の公式の意味するもの

その6 「幻惑(illusion)」と「本当らしさ」

その7 引用から創作へ

佐藤 裕子(さとう・ゆうこ)

1957年北海道生まれ。関西学院大学大学院博士課程満期退学。博士(文学)。現在フェリス学院大学教授。子どもの頃から本が大好きだった。近所の書店で好きな本をいつでもツケで買ってよいことにしてくれた両親にはいまでも深く感謝している。コナン・ドイルやアガサ・クリスティをはじめとする海外のミステリー、『ナルニア国物語』『指輪物語』『ライラの冒険』などのファンタジーが大好き。日本の作家では、宮部みゆきの江戸もの、梶中恵のしゃばけシリーズも気に入っている。

著書に、『漱石解説—〈語り〉の構造』(和泉書院)、『漱石のセオリー—『文学論』解説』(おうふう)他。

夏目漱石を例に挙げて、語り手の機能について論じたところが面白かったのでメモしました。

一人称視点

三人称視点

一人称と三人称が入り混じった視点

神のような視点

一人称は局内の語り手。登場人物が語る。

三人称は局外の語り手。○○は、太郎は、といったように一步引いた目線。

入り混じった視点というのは、複数の登場人物の目線から同じ事件を繰り返し描いたり、『私』が過去の自分を描きつつ回想するような重層構造の視点。過去の自分の認識を現在の自分が検証する→漱石の『ころ』の先生。

神のような視点…？これがわかるようなわからんような。

文学の授業でやった、局外の全知の語り手の事？

※局外の語り手の中でも、登場人物の主観を一切挟まず、局外にも関わらず人物の心情行動話の流れ全てを知っている語り手のこと。

また、同じ局外の語り手でも、登場人物が途中で語り手の役割を担った時、それは部分知の語り手となる。

でもそれは結局、局外の語り手と三人称視点が同じと言ってるだけな気がする…。



で、授業でやったもう一つの語り手、映し手を復習してみる。  
これもまたわかりづらいのでとにかくノートをかみ砕いてみる。

映し手とは…

考えたり感じたり知覚したりするが、語り手のように、読者に向かって語りかけない登場人物のこと。

登場人物が語り手となった場合(局内の語り手)、話してがリアリティを持って語ると映し手になる。

×「彼は歯が痛い。」←読者に語りかけている

○「あいてて、歯がずきずきする。」←感じたことをそのまま描いている、つまり語りかけていない

その現場に読者がいるように錯覚させる、読者は登場人物の見たり感じたりしたことを見て感じるができる。

表現が直接的になった。登場人物に語らせると、人物が二重の役割をしてしまうため。

つまり、語り手が 1. リアルに語る 2. 読者に語りかけない この二つの条件を満たした時、映し手となる。(ラノベの語り手みたいな？ちなみに今こうして私が書いているこのブログの記事も、映し手のように感じる)

(なお、現在の小説は局外の語り手+映し手が一般的)

ここで神のような視点の説明を抜粋。

「語り手による意味づけや説明が極力抑えられています。作品の解釈は読者にゆだね、読者の多様な解釈を許す方向へと発展しているのです。」(133)

「まさに神のような、ただ見ているだけの視点を採用した「語り」でした。」(133)

「人間の姿を、それ以上でもなく、それ以下でもないものとして映し出そうとしていたのです。」(134)

…局外の語り手のような書き方もされているが、ここはやはり映し手と判断すべきなのか。『道草』と『明暗』をきちんと読まないとわかりませんが。

語り手の問題は私も大いに興味のある問題です。今後とも詳しく考えていきたいです。

御書を読んで、、、「漱石も考えた」

文学とは何か、文学を学ぶことは役にたつのか。文学の研究を通して何を求めることができるのか。そもそもなぜ文学を学のか。

これまで何度か作品として登場してきた漱石もまた、この問いを考え続けた一人です。夏目漱石は、若い頃から漢文に親しみ、自分で漢詩を作ることができました。友人の正岡子規から俳句の手ほどきを受けていて、東洋の詩歌や文学に造詣が深い人でした。加えて、東京帝国大学文科大学では英文学科に所属し、英語と言うことばと、そのことばを駆使しながら生み出される英文学に深く触れることになりました。イギリス留学中には英語を学ぶ中で、当時のヨーロッパで流行していた心理学や歴史、精神分析学、社会学、文化人類学など、様々な学問に触れ、多くの文献を読みあさっています。当然の成り行きとして、大学・大学院在学中に突き当たった「文学とは何か」「文学を学ぶ意味とは何か」という問いに真っ向から向き会わざるを得なかったのでしょう。

漱石が切実に文学の正体を求め続けた理由がもう一つある。

先に触れたように、「文学がことばによる芸術全般」を指すこととなり、最も新しい学問として認められはじめたのは 20 世紀初頭、漱石がイギリスに留学したのは 1900 年、19 世紀最後の年でした。漱石の生きた時代、「文学とは何か」という問いは、新しい概念が成立した時代にふさわしい、最新のテーマだったのです。

漱石は留学中に膨大な数の文献を読み、ノートを取り、「文学とは何か」に向き合い、考え続けます。そしてその成果は、帰国後、東京帝国大学文科大学英文学科で、「英文学講義」として約 2 年間講義され、1907 年(明治 40 年)「文学論」として出版されました。

## 漱石の文学論

「文学論」はまさに、「文学とは何か」(漱石のことばでは、文学とはいかなるものぞ)と言う問いから始まります。

それを考える際の一つの方法として、人類が古代から蓄積してきた **Literature**=文献を「神話」「叙事詩」「叙情詩」「小説」といったジャンル(種類・様式)に振り分け、研究するというものがあります。けれども漱石はそうしませんでした。作品を読んだときに読者が感じるもの、つまり作品によって引き起こされる人間の情緒、読者の心理状態に着目したのです。

漱石は、面白いとか、悲しいとか、楽しいとか、気味が悪いとか、怖いとか、落ち着かないとか、ウザイとか、さまざまに感じることを、そうした効果・役割を持つものこそが「文学」とであると定義しました。作品の種類や形式によってではなく、人間の心理に具体的に働きかけ作用する「力(ダイナミズム)」をもつものとして捉えていたことがわかります。

漱石は、そうした効力・役割の「もと(ネタ)」を四つに分類します。

「感覚」…見たり触ったりした感じや温度や味覚など感覚に関するもの

「人事」…人間に関するあらゆる事柄、事件、出来事、そこから生まれる感情

「超自然」…神や仏、鬼や妖精など、この 4 つのものでないもの、不思議なもの

「知識」…公式や定理、事典や教科書の記述、作者によってあらたに提供される知識

さらに今度は、作者と読者の双方に目配りしつつ、そうした効力を生み出すために創作をする作者の側はそのどのような仕掛けをこしらえているか、また読者の側はどのような気持ちの変化を体験しながら作品を理解するかをまとめています。

そして最終章では、「文学」と「文化的・社会的・政治的状況との関わり」について論じています。人は作品を読み終わったとき、好き、嫌い、むかつく、ビミョウなど、何らかの形で自分にとっての価値を判断します。読書以外の場面でも同じです。買い物に出かけ、あれにしようか、それともこれにしようか、と悩んだときには、どちらが好きか、自分に価値があるかをよくよく考えて判断します。それは一見、個人的な感覚であり、自分一人で決めているように思われますが、実は所属している社会の有り様や時代の流れに常に左右されていると言うのです。

漱石が「文学論」で、人の好みは、それぞれの背後に存在する国籍・性別・受けた教育・宗教・実体験・読書体験・生育した社会の政治的状況や家庭環境に由来していると書いているのも、理解できると思います。

#### 作者＋読者＝文学

漱石の凄いところは、「文学」には作者だけではだめで、その作品の価値を発見する「読者」が必要であると主張した点にあります。「文学は作者が作り出し、作者の主張したいことを集約したものである」と言う当時の一般的な考え方にとらわれなかったからこそ出てきた考え方です。

明治以降、近代に入って昭和 40 年頃まで、文学研究では、「作品」ではなく「作者」の研究が主で、しかも作者の意図を探ることに集中した時代がありました。でも作者の意図したことなど、直接聞いてみなければ結局はわかりません。現在生きている作者ならともかく、「万葉集」の歌人である柿本人麻呂とか「源氏物語」の紫式部とか、私たちは彼らがどんな顔をしていたのかも、どのような性格だったのかも、想像を膨らませて楽しむことができても、実際に会って確かめる事は叶いません。だとすると、たとえ作者の意図と言うものはあったとして、それは残された作品から類推するしかないのです。そして作品が単独で私たちに語りかけてくるものは確実に存在します。作品をもっと理解するために、背景をより詳しく知ろうと思えば作品が成立した時代背景や、歴史的状況を調べることになります。

漱石は、作者（発信者）が創作したものを、作者以外の人間（受信者＝読者）が「読む」ことによって、はじめて意味が発見され、価値が生まれると考えました。つまり読者が「作品に関与する」「作品と関係する」ことによって、作品の価値と意味が生まれるということです。詩であれ、小説であれ、絵画であれ、ただ描かれただけで作者以外の誰の目にも触れなければ、描いた本人以外にとっては意味を持ちません。

これまでも少しずつ触れてきたように、現在の専門家の間では「読者論」や「受容理論」

という文学理論として一般的になっていますが漱石が示したことはまさにそれに先駆けるものであったわけです。

#### 物語化するのは他人の目

書くことを選ぶ、選ぶ作業が「文学(フィクション)のはじまりで、ここでいう「フィクション」は、想像の産物とか現実でないという意味では無く、「物語化される」ということです。何を書くかを選ぶという行為は、その出来事や心の動きがささやかであっても、体験している自分とは別の目で自分の身に起こったことを見る、つまり相対化することです。紙に書く日記でもインターネットのブログでも、書きたくない事は書かないという選択がなされた時から物語になるのである。

文学が読者の心理に果たす努力・役割その力は何によってどのように作られるのか読者の内部では何が起こるのか漱石の話も聞きながら具体的に見ていく。

#### ほんとかもと思わせる仕掛け

1900年(明治33年)、当時の文部省から英国留学を命じられた漱石は、約3年間ロンドンに滞在します。文学とは、人間の「心理に具体的に働きかける作用する力(ダイナミズム)である」と捉えた漱石が、その地で、文学作品が果たす効果はどのようにして生まれるのかを考えたのは自然の成り行きだった。

その中で彼は、現実(real)であるということと、文学(フィクション)における本当らしさ(verisimilitude)を区別しました。「本当らしさ」とは、よく考えたら現実には決して起こらない事であるにもかかわらず、読者が作品を読み進める中で、あり得るかもしれない、と考えることです。この効果を漱石は「幻惑」と呼んでいます。作者の仕掛けたトリック(ワナ)に惑わされるというわけです。

「文学論」第四篇では、その「本当らしさ」を伝えるための手段について考えています。「本当らしさ」と言う仕掛けを作るために、どんな文章、表現方法やテクニク(修辞)を使うかということです。中心軸は、あくまでも読者心理への働きかけです。伝統的な修辞法の分類だと「ことば」、「表現方法」、「文体」…などと分けて考えるのですが、漱石はその独自のやり方で組み替えて、「二つの比喩と二つの技法に分類しました。

- ①あるものを別の何かに置き換えることによる比喩
- ②連想を利用してあるものを別のものにつなげることによる比喩
- ③写実的な描写の技法
- ④「語り」の技法

の4つです。

ここで注目したいのは、④の「語り」の技法です。ここでの「語り」(ナラティブ・パー

スペクティブ)とは、「物語がどの立場から語られるか(見地)」に焦点を当て、「どのような人称と視点を使ってその物語が語られているか」を問題とするものです。「人称」は、語り手を誰にするかです。「私は」「僕は」などであれば一人称、「裕子は」「ジョーは」などであれば三人称による語りです。

漱石は、近代小説の技法を通しての「語り」の問題をかなり意識していたようで、後述するように、自分が書くようになってからも「語り」に関する様々な技法を試みています。この「語り」の技法は、映画など、映像の理論と多くの部分で重なっていますし、「視点」はいわばカメラです。カメラ・アイをどこに設定するのか、高さと方向に限定するだけでも様々な方法がある。どちらの方向から撮るか、そして、登場人物と同じ目線で撮るのか、あるいは上から、あるいは下から、はたまた離れて撮るか、それぞれ、できた作品は全く違う見え方(語られ方)になります。そしてカメラは1台とは限りません。1カメである登場人物Aの視線で向こうから歩いてくる人物Bを撮る。長いショット。近づくごとにカメラも寄っていく。2人が声を掛け合う位の距離になったところで、2カメにかわり上から2人を撮ると言うようなことがあります。

「語り」の技法も同じなのです。ある出来事が当事者自身によって語られるか、あるいは当事者以外の視点からかたられるのか、また、偏った一方的な立場からかたられるのか、あるいは客観的な立場からかたられるのかなど、まさに人称と視点の組み合わせによって、語られ方によって、一つの出来事からでも多様な物語が生まれます。

#### 小説家夏目漱石誕生

1903年(明治36年)に帰国した漱石は、東京帝国大学と第一高等学校で教師として勤め始めます。そして、それまで文学の研究を自分の仕事としてきた漱石が、今度は自ら小説を書くようになります。友人である高浜虚子とともに漱石は「山会」と言う朗読会に参加していました

「小説は、山がなくてはならない」ので山会です。その朗読会で自作の作品を読んだところ、メンバーに大いに受けて、高浜虚子の勧めもあり、1905年(明治38年)1月、彼の主催する雑誌「ホトトギス」に掲載することになりました。それが「吾輩は猫である」(現在の第1章部分)です。38歳でした。一回読み切りの予定だったと言いますから、これまで研究してきたことを具体的に表す実験のようなものだったのかもしれませんが、けれどもそれがまたまた大好評でした。求められるままに漱石は続編を書き、そうしているうちに小説家として生きていく道を探りながら一生、書き続けることになります。

ちなみに、漱石が東京帝国大学に勤務しながら書いた作品は、「吾輩は猫である」をはじめ12作品です。その後、辞職して朝日新聞に入社したのが1907年(明治40年)、亡くなったのが1936年(大正5年)ですが、この10年足らずの間に、約15のおもだった作品を描き続けました。

漱石作品のなかから、比較的良好に知られているものは、書いた順に並べてみましょう。

「吾輩は猫である」

「坊ちゃん」

「草枕」

「虞美人草」

「三四郎」

「それから」

「門」

「彼岸過迄」

「行人」

「心」

「道草」

「明暗」(未完)

「語り方」の実験

最後の「明暗」を執筆している途中で、漱石は亡くなります。ちょうど 50 歳でした。この 12 作品についてどのような「語り」が採用されているかに着目してみましょう。先の「語り」の技法別に分類すると、まあなんと見事に、順番通り 4 つに分類できるのです。

第一期… 1 人称の「語り」の物語群

「吾輩は猫である」「坊っちゃん」「草枕」

第二期… 3 人称の「語り」の物語群

「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」

第三期… 複数の視点による「語り」の物語群「彼岸過迄」「行人」「ころ」

第四期… 神様のような視点による「語り」の物語群

「道草」「明暗」

漱石が「語り」の技法を意識していたことがよくわかります。まるで、「語り方」の実験を、生涯を通じて進めていったかのようです。

第 1 期の一人称の「語り」の物語群では、作品中の 1 人の人物（猫もいます）が「視点人物」と「語り手」の双方を担う者として設定されています。カメラは 1 台。その人物の目がそのままカメラになります。

「視点人物」と「語り手」が一致する場合、物語内の出来事は全て「視点人物」を通して語られます。読者は「語り手」の見方に完全に左右されることを前提として読み進めることとなります。

手紙や日記の形で語られる場合も同じです。私が書く手紙は私の視点を通して書かれています。誰に宛てた手紙だとしても、その誰かに伝えたいこと、私が書きたいことしか書き

ません。日記もそうです。

語りの実験として読む

作中の一人の語り

「吾輩は猫である」

猫が語る人間たち

「坊っちゃん」

「おれ」が振り返ったあの頃

「草枕」

「余」の胸中には何があるか

「虞美人草」

美しい女性は死に向かう

二人称の語り

「三四郎」

バカだけど目が離せない

「それから」

働かないやつが何を言う

「門」

静かな暮らしに刺さる棘

連続する物語群

「彼岸過迄」

くるくる変わる語り手

「行人」

弟が語る兄

「心」

わからないままに残されて

語らない語り手へ

「道草」

「明暗」

いったい漱石は何を描いたのか

漱石を読みなおす

漱石忌

コメント (4)

、「文学って役に立つの?」という学生からの問いと、「文学って何だろう」という問いに答えたものです。「文学とは何か」という問いは、夏目漱石が著書『文学論』で取り上げたテーマでもあります。

2016/12/10(土) 午後 0:51

漱石国際シンポジウム・イベントのの執行委員長の役を果たされた佐藤裕子さんの著書です。フェリス女学院の学生向けにセミナーのテキストとして作られました。

2016/12/12(月) 午後 1:42

漱石文学論の解説は、とても理解しやすい。他に様々な方々が解説しているが、すっきり理解にはいたらない。読者の立場に立った解説がよかったのでしょうか?

2016/12/13(火) 午前 9:11

漱石は留学中に文学に対する理論として(F+f)+の考えを確立しています。

いろいろ解釈がありますが、

フォーカス、ファクトの F+小文字の f、フィーリング、情緒です。

このように表現された文学は、これを読む読者との関係を通じて成立させると。

書き手と読み手の間には創造的なコミュニケーションが生まれ、発起、展回します。

「文学的」センスは、事象の分析から写生、物語化、まとめて発信する手法、技術ですね。

読み手の方もそれなりに読みの深化が問われます。

文学というものは、ドキュメントでもフィクションでも可で

書き手と読み手相互において成立させるものですね。それぞれの人格形成や、事象の分析、総合化、そして表現を通しての創造化、読者も全く同様な意識思考作用を要求されます。

最近、ようやくと漱石読書のシルエットが見えてきた感じです。

こういうセンスは、普段の暮らしにおいても、自らに思考センス、生き方、人間関係の創造においても十分に役に立ち、世界の広がりをもたらすものと、思われます。